



# 涙を飲んで勇気ある撤退

-童貞同盟-

*ririnblackstar*

結婚するまで高潔を保つ。

それはつまり、

——童貞同盟。

結成したときから今まで、僕たちは信じて疑わなかった。

純潔でいることは、高潔であることと同義だと。

「.....私じゃダメなのかな？」

バスタオル一枚、その身に纏う。必然的に胸の膨らみや、無防備な白いふとももに視線が行ってしまう。

失礼な視線をさげようと、知世ちゃんの顔を見る。

普段は長くさらりとした黒髪。

しかしシャワーを浴びた後だからしっとりと湿っていた。濡れ髪が情欲をそそる物だと知識では知っていたが、実際に見ると想像以上だ。

頬は上気して赤く、まるで僕に酔いしれているかのように見えるが、きっとそれはお風呂上りのせいで、僕に起因する現象ではない。ないはずだ。

それでも潤んだ瞳で見つめられると僕の理性はフェードアウトしそうになる。もちろん代わりにフェードインしてくるのは本能のひとつなわけで、ここで理性を失ってしまったら、僕は知世ちゃんをどうしてしまうか、それは自分のことなのにわからない。

「ねえ」

と言い、さっきから何も言えず、ピクリとも動けもせずにいる僕に近寄ると、知世ちゃんの手で僕の手をやわらかく包んで持ちあげた。

知世ちゃんが手をどこに持っていこうとしているのかなんて、手の向きを見れば分かる。そんなに強く掴まれているわけじゃないから、手を引けばそれを阻止することなんて簡単だ。

でも、僕はされるがままだった。

視線は僕の手の方を追っているのに、その危険性を認識できているのに僕は抵抗できない。

知世ちゃんが自分の胸にふわりと僕の手を置いた。

ぽよん、と音が脳内で響く。

「試してみてよ」

トドメの台詞。

僕の理性は処理能力を超えて、オーバーフローした。

——どうしてこうなった？

自慢じゃないが、僕がもてるはずがない。並以上の容姿を持っているわけでも、特別に頭がいいわけでも、県大会で入賞できるような運動神経を持っているわけでもないからだ。

じゃあ、優しい性格かと言えば……ああ、奴らよりは間違いなく優しい性格だ。

奴らとは、金持ちで顔だけじゃなく、生き方も格好いいから、モテにもてまくる真（まこと）と槻（つき）の二人。そして、少女のような愛くるしく、男の僕ですら守ってしまいたくなるような容姿に、悪魔の性格を備えた最終兵器の繭彌（まゆみ）の三人のことだ。

どうして世界というかレイヤーの違う三人とつるんでいるかなんて僕は知らない。奴らから声をかけてきたからだ。

そして、「価値ある童貞を目指す」とかなんとか言う「童貞同盟」に、不思議と共感して僕は仲間になった。たぶん、三十歳を超えても童貞でいる自信があったからだと思う。

ここまで説明すれば、なぜ知世ちゃんとかこういうことになっているのか想像つく人もいるのかもしれない。

でも、一応語らせて。これは僕の愚痴に近いんだけどね。

好き。

なんて女の子に言われたことはない。一度でいいから、「んー、友達としてなら、好きかなあ」とかそういうのでも良いから直接言われたい。

ずっとそう思っていた。

だけど、奴らとつるんでいるとその台詞を毎日のように聞くことになる。もちろん、僕に向かって言う訳じゃない。

真とか、真とか、真とか、槻とか、槻とか、たまに繭彌とかそういうローテーションで。

この日は同じテニス部の知世ちゃんだった。

お目当ては真。

僕たち四人が校門を出て、カラオケボックスに行くために槻の家の車に乗り込もうとしたところだった。

「真くん！」

呼び止めた時、知世ちゃんは必死な表情だった。普段はおとなしく、おっとりした感じを受ける彼女が大きな声を出すというのは、それだけで勇気のいることなのだろう。不安を豊かな胸の内に押しこめるかのように、これから行う行為が成功するのを祈るかのように両手をぎゅっと握って強く胸に押しつけていた。

「なに？」

冷たい。いや、雨が降っているわけじゃない。

真の返事の仕方が冷たいのだ。

「あ、あの」

「大事なこと？」

知世ちゃんの内事なんて察しがついているはずなのにわざわざ遮って聞く。どれだけ意地が悪いのだ。こんなにかわいい子をいじめるなんて、こいつの思考回路はきっとショートしてしまっているに違いない、と毎度思う。

「私、真くんのことが好き！」

言った。というか叫んだ。さらりとした長い黒髪が、ふわりと風に舞う。夏に入りかけたこの季節。風は暖かく、知世ちゃんが持っている雰囲気そのままだと思った。さっき、真が言った冷たい言葉が打ち消されたかのように感じる。

「俺は嫌い。それでいい？」

真は表情を変えずに淡々と言った。

何度も聞いたことがある台詞だが、聞き慣れない。正直、「価値ある童貞を目指している」童貞同盟の立場から言えば、女の子にこんな言葉をかけること自体間違っていると思う。どう考えても礼節に背く。

「ばっかじゃない？ テニス部、お似合いのカップルとか言う噂を真（ま）に受けて。真があんたのこと好きになるとでも思ったの？」

繭彌が三つ叉の矛で知世ちゃんを貫いたのがはっきりと見えた。

やっぱりやつは悪魔だ。身長なんて百五十センチなくせに、もう天使と言っても過言じゃないぐらいかわいいのに、本当に性格は悪魔だと思った。

——そこまで言わなくてもいいじゃないか！

そう言って抗議しようと思ったときだった。

「……ごめん」

知世ちゃんは小さな声で謝っていた。

僕はその声に振り返ると、目が潤んでいた。つやのあるくちびるは震えている。泣くまいとする意識と、受けた衝撃による自立的な反応が頬を引きつらせる。

きれいな顔はきれいなまま歪むのか、と不謹慎な考えで僕は止まる。

「おい。行こうぜ」

槻が車から呼んだ。すでに後部座席の奥に座っている。

「そうだね」

知世ちゃん表情を見て満足した繭彌は真の手を引いて車に行く。「それでさー」と、知世ちゃんの告白はなかったかのように別の話題を口にする。

こいつら何様だ！

「おい。賢仕も早くしろよ」

槻が僕を呼んだ。僕は槻の怒った顔と知世ちゃんの泣きそうな顔を見比べる。

今ここで槻の車に乗ることは、人間としてどうなんだろう。

今までもこういうことがたくさんあった。

でも、それは僕から見ても身の程知らずで、ダメモト的な告白だったから、振られてもみんな笑っていた。

からかうような告白が鬱陶しかったのだろう。みんな、告白してくる奴らを冷たくあしらうようになっていた。

でも、知世ちゃんは違う。

本気で告白して、本気で振られて、そして、自分を見失うぐらいショックを受けているんじゃないだろうか。

「ごめん、先に行って」

僕は知世ちゃんを見ながら答えた。槻の悪態が聞こえていたけど、振り向かず手を振ってごまかした。

僕は泣き崩れてしまった知世ちゃんを家まで送り届け、少しだけ話を聞いてほしいという知世ちゃんの話聞き、遅くなったしお礼の意味をかねて、ご飯を食べて行ってほしいと言われ、それぐらいならと承諾した。

すると「顔がぐしゃぐしゃで恥ずかしいからシャワーだけ浴びさせて、十分ぐらいだから」と言われ、素直に部屋でケータイ電話をいじりながら待っていた。

ここまではごく自然の流れだった。

どっからだ。おかしくなったのは。

知世ちゃんの胸からはっきりと鼓動が伝わってくる。それは異常なまでの音で、知世ちゃんが必要以上に緊張しているのがわかった。

知世ちゃんに触れたときに跳ね上がった僕の心臓は、知世ちゃんの手と反比例するように落ち着きを取り戻す。

「ごめん。僕は軽々しく女の子を試すような人間じゃないんだ」

自然と口をついた台詞。

知世ちゃんは魅力的だと思う。そして、知世ちゃんが失恋を慰めた僕に少なくない好意を抱いてくれたのもなんとなく感じる。

でも、だめだ。

僕は「価値ある童貞を目指す」童貞同盟の一員。繭彌は当然としても、あれだけモテる真や槻だって規約を守っているのだ。

「試すなんて言ってごめんなさい。でも、今は賢仕くんに抱いてほしいの」

一瞬の隙を突かれた。

僕は知世ちゃんに抱きしめられる。なぜだかバスタオルは足下にずり落ちた。二人の間にはこの前衣替えした時に取り出してきた未だ樟腦のにおいのするワイシャツしかない。

やわらかな感触がほぼダイレクトに伝わってくる。

僕は喉を鳴らす。思った以上に大きな音がする。

きっと知世ちゃんにも聞こえた。

はからずとも僕の邪な考えは知世ちゃんにばれてしまった。もうここまで来たら知世ちゃんの合意もあるし、何より知世ちゃんは美人でスタイル抜群で、かつ「やわらかい」のだからいいんじゃないかって思う。

僕の理性はもうとっくにフェードアウトして、本能のひとつが喉までフェードインしてきている。

昔の人は言った。「据え膳食わぬは男の恥」と。

しかし、だめだ。

駄目なものはだめだ。童貞同盟の規約風言えば「ならぬものはならぬのです」

「じ、じぶんを、大事にす、するんだ。知世ちゃん」

「……そう。賢仕くんも私じゃダメなんだね」

僕の肩に涙がポツリと落ちた。

もう自分で自分の舌を噛み切りたい。結局、また泣かせてしまった。

「そ、そういう意味じゃないよ。僕は結婚するまで純潔を守ると誓っているんだ。だから、知世ちゃんに魅力がないという訳じゃなくて、僕が僕であるために、ここは涙を飲んで勇気ある撤退をするわけで……」

「ふふっ」

知世ちゃんは僕から離れる。

一糸も纏わぬ知世ちゃんの姿が目に入り、僕はすぐに顔を背けた。

知世ちゃんは何を思ったのか僕の後ろに回る。

「しかし、まわりこまれた。なんてね」

いたずらっぽい台詞が聞こえる。それは、僕の決意を大きく揺るがす一手だった。

どうすんの？ 僕。

1) もう一度「にげる」

2) じゅもん > せっきょう

3) はなす > せっとく

4) つかう > どうぐ > ふで

表紙イラスト

背景写真補完の会 (<http://masato.ciao.jp/haikai/>)

文・編集

Ririn★ (<http://twitter.com/ririnblackstar/>)